

DNAから見た出雲人の起源

国立遺伝学研究所 集団遺伝研究部門教授

齋藤 成也



《講演要旨》

ヒトには46本の染色体があり、そこに32億個の塩基4文字(A, C, G, T)のアルファベットの情報が母親と父親からそれぞれ伝えられて、一人の間人は2セットのゲノムを持っています。このヒトゲノムの塩基配列が2004年に解読されました。それから10年ほどしかたっていませんが、この膨大な情報をもとにして、現在地球上の多数の人々のゲノムDNAにおける多様性が調べられています。私達は、これまでに日本列島の3人類集団を調べました。北東から南西に大きく伸びている日本列島は、北、中央、南の三地域に大きくわかれています。人間もまた、大きく三種類の人々がおおよそ日本列島のこれらの三地域に住んできました。北部には「アイヌ人」、中央部には「ヤマト人」、そして南部には「オキナワ人」です。これらの人々のゲノムDNAを調べたところ、日本列島人は、おそらく弥生時代以降に渡来した大陸の人々のゲノムを中心としつつ、それとは遺伝的に異質な集団との交雑によって、異質な集団のDNAの多い順にアイヌ人、オキナワ人、ヤマト人が形成されたと考えられます。この異質な集団とは、旧石器時代から縄文時代に相当するヤポネシア時代に日本列島に居住していた人々、いわゆる「縄文人」だったと思われます。この結果は、人骨の研究から提唱された日本列島人の二重構造説を支持しています。

今回、ヤマト人に含まれる出雲人の皆さんのDNAを調べさせていただきました。地理的に出雲は日本海に面しており、朝鮮半島に近いのですが、東京周辺在住の関東ヤマト人のほうが、わずかではありますが、出雲ヤマト人よりも韓国人や中国人に遺伝的に近いという結果が得られました。これは、これまで単一だととらえてきたヤマト人(日本列島本土人)のなかに、多様性があることを示唆しています。そこで私はヤマト人の中にも二重構造があると考え、「内なる二重構造」モデルを考えています。すなわち、弥生時代のはじまりよりも前の、縄文時代のおわりごろから、どこからか人々が日本列島に渡来し、縄文人が少なかった中国四国地方から近畿地方、中部地方にひろがっていったと考えます。その後、弥生時代以降になると、九州北部から関東までの軸に沿って、朝鮮半島などから多数の渡来人とその子孫が居住し、現在のヤマト人を形成したとするものです。このモデルにしたがえば、出雲人は、前者の、古い渡来人のDNAをより濃く伝えていることとなります。くわしくは、今年刊行予定の岩波ジュニア新書『日本列島人の歴史』をごらんください。

- | | | |
|----|--------------------------------------|---------------------------------|
| 略歴 | 1957年 福井県生まれ | 2002年 総合研究大学院大学遺伝学専攻教授(兼任) |
| | 1979年 東京大学理学部生物学科人類学課程卒業 | 2005年 日本学術会議会員(兼任) |
| | 1986年 テキサス大学ヒューストン校生物医科学大学院修了(Ph.D.) | 2006年 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻教授(兼任) |
| | 1989年 東京大学理学部生物学科人類学教室助手 | 著書 「DNAから見た日本人」(ちくま新書) |
| | 1991年 国立遺伝学研究所進化遺伝研究部門助教授 | 「ゲノム進化学入門」(共立出版) |
| | 2002年 国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門教授 | 「絵でわかる人類の進化」(編著・講談社) 他多数 |